

古本説話集の語彙について

——主として語性の観点から——

山内洋一郎

目次

- 一、はじめに
- 二、和文脈と漢文訓読文脈
- 三、「頼りなし」と「貧シ」
- 四、和語と漢語

一、はじめに

梅沢本『古本説話集』は、延べ語数約一三、〇〇〇の小冊子であるが、語彙史資料として見るときも、相応の価値を有している。所収語彙の延べ語数・異なり語数、品詞別語数と比率など、計量的側面については、『古本説話集総索引』（風間書房、昭和44）の付篇で六種の表を掲載し、基礎語彙的側面については、「物語体説話文学の語彙」（『日本の説話』7、東京美術、昭和49）で、表示と分析を行った。そこで、本稿では、いかなる語性の語彙によって本資料が構成されているか、語彙史の資料として語種位相の面から見ていかなる特色があるか、こういう観点を中心として考察してみようと思う。

説話集は一般に編者が不明であり、編者自身のあり方による個性的語彙相は論じがたい。多かれ少かれ、編者の言語文体が統一体とするのに働きかけているはずであるが、この観点による把握は困難である。説話自体については、書承か口承かが重要な点であるが、説話集全体としてこのどちらか一方であるよりも、所収各説話が事情を異にしていることが多く、そ

れも口承から書承へなど幾層を経ていることも考えられ、混然としているのが実態であろう。編者なり伝承者なり、文字化に当った人の個性の反映を論じえぬのはもとより、原資料との表現距離がいかにあったかもさだかではない。結局、一書として編まれていることを重視して、全体を一語彙体系と見るほかないであろう。しかしながら、数部に編成せられている場合に、『今昔物語集』のごとく、部により文体用語に差違の見えることも事実であって、それが明瞭に察知できるときは、無視できない。

『古本説話集』上下二巻は、内容を異にしている。

巻上 主に和歌説話 和歌84首(短連歌2組を含む) 延べ四七〇〇語

巻下 主に世俗仏教説話 和歌1首 延べ八二三四語

説話内容の相違は語彙相にもそれぞれの特性をもたらし、文体も異なることが考えられる。文体については別に詳しく考えたいが、文体の一要素である用語としてもこの点を考えねばならない。

『古本説話集』は、ひらがな表記文体で、説話というジャンルの中でも平安時代以来の和文脈の系統に属している。時代は院政末期と位置づけておく。『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の中間となる。(以下、この三資料を、『古本』『今昔』『宇治』と略称することがある。) 巻上では王朝の公卿殿上人女房が多く登場し、その和歌も多い。『大和物語』など先行文献を承けるものも多い。従って、王朝語彙を基調にしているかと予想されるけれども、先行文献そのままの文章はないのであって、動詞「^レがふ」という稀な、恐らくは口頭の語もまじっているのである。『今昔』と共通する説話も、それを単にひらがな体に改めた形ではなく、王朝語彙に全面的に改めた形でもなく、改変・取捨の方法が複雑に行われている。(改変、取捨という語を用いると、『古本』が『今昔』を直接承けて成立しているかのように見えるが、そういう単純なものではないことは周知の通りである。時代的前後関係でもってこの語を用いる。) 巻下は、日本の仏教説話を収める(インド説話1種)が、下層の僧や庶民の登場する世俗性の強いものが多い。『今昔』『宇治』と共通するものは、比較するときそれぞれの資料性を浮び上らせるので、以下

に多く用いる方法であるが、類話を持たない、或いは遠い類話で直接比較することが不可能なものもある。こういう説話は口語性の強いものと見て差支えないであろう。

『古本説話集』の語彙の基調は何であるか。説話内容（素材）の面を除いて言えば、和文脈の伝統を承けつつ時代の口語性を強く加えている。書承を考えさせる個所もいくつかあるが、口承性が強く（梅沢本が文字化された最初とは考えない）、語りらしい不整表現のある面と、適確な用語で生彩あらしめている面とが混然としている。このように考えている。

二、和文脈と漢文訓読文脈

和文脈の用語と漢文訓読文脈の用語とが、それぞれ独自性を持ち対立することのあるのは、よく知られている。本資料でもこの観点から一見することは必要であろう。

表現素材の相違に基づく用語の差は、文体的差を作る要件として無視はできないけれども、同義、或いは極めて近似した意義の複数の語が、両文脈に分れて存在するとき、最も客観的に対立的存在と認めることができるであろう。築島裕博士は主として「慈恩伝古点」と『源氏物語』語彙との対比の中で、二形対立について、「助詞や助動詞ばかりでなく、副詞・形容詞・動詞から、更に名詞の類にまで及ぶやうである。」⁽²⁾とし、「その一部の例」として、名詞10、動詞36、形容詞5、形容詞・動詞から、更に名詞の類にまで及ぶやうである。⁽²⁾とし、「その一部の例」として、名詞10、動詞36、形容詞5、形容詞7、情態副詞18、程度副詞3、陳述副詞6、以上品詞別に85の組合せを掲げ、その他にバ行音とマ行音の対立なども示されている。

まずは、右に示された語例について、『古本説話集』でいかになっているかを調べてみよう。「コモゴモ——かたみに」など双方とも存しないものには言及しない。本書の言語量の少なさ、表現対象の範囲の狭さなどに起因するであろう。カタカナは「慈恩伝古点」の語、ひらがなは『源氏物語』の語で、両文脈を代表するものと一往認められる。『古本説話集』での例数を語の下に示す。

A 漢文訓読系の語が存して、対立する和文系の語が存しない。

右の場合は、『古本説話集』が平仮名表記和文脈系資料であるから、該当例がなくて不思議でない。実は左の一種がある。
。タマタマ 1 —— たまさかに

いまはさやうの事する人もなければ、まいる人もなし。たま／＼まいれど、さやうの事するひともなきを、くちをしく
おぼしめされるに
（大斎院事、第二）

「大斎院事」は、大斎院の情趣深い生活を和文調で描き、硬い表現は見られない。その後半は『今昔物語集』巻十九第十七語とはほぼ対応しつつ、情態の形容を付加したり、分析的表現を総合して余情ある表現としたりしており、「ヒソカニ」に
対立する「みそかに」を、

院ノ内 竊ニ 見ムト云テ入ヌ。 蜜ニ 居テ見レバ、

院のうちみそかにみむといひていりぬ。…みそかにめてみれば、

このように用いている。「たまたま」は「適ニ参ルト云ハドモ」に対応している。両者ともに漢文訓読的氣息の感じられない文脈である。「たまたま」はそういう語性を持っているのだろうか。築島氏が「たまさか」について、「訓點にも見える語でハ中略√極めて多くの例がある語である」とされることから見れば、「たまさか」と「たまたま」の相違の本質は、文脈の相違ではないのか。木之下正雄氏が、「たまさか」を時間的に稀なこと、「たまたま」を偶然で稀なことと差を説かれたのは、本義として妥当なように思われる。『古本説話集』ではこの意味によって「たまたま」が見られるのであろう。

『源氏物語』で「たまさか」32に対し「たまたま」が源氏の詞に1例しかなく（朝顔）、『枕草子』の1例が大進生昌の詞であるなど、「一般には見出されない語」（築島氏）であり、二形対立の中に含めるのも当然であるが、和歌でも、和泉式部が返歌に俳諧風に用いたり（和泉式部日記）、「白露の玉」と掛けて用いたり（金葉集、俊賴）することから始まって、鎌倉時代には和歌でも通常の用語ともなっていてゆく（夫木和歌抄、万代和歌集）。口頭語が、その俗語臭を去って、和歌の中に位置を占めてゆ

くように見える。散文では早く『宇津保物語』に7例あるが、『今昔物語集』までは稀で、以後は『宇治拾遺物語』『方丈記』『平家物語』などに漸次多くなってゆく。一方「たまさか」は、『竹取物語』に始まり、『源氏物語』に最盛期になり、以後は少なく、あっても一二例に留まる。「口頭語や漢文訓読、男子系の文章ではタマタマの方が優勢であったと思われる。」
「タマサカは、古典的感じの、女性的用語になっていたのであろう。」という木之下氏の概括は、語性として従いたいところである。

B、漢文訓読系の語がなく、和文系の語のみ存する

この場合が最も多いのは当然のことである。組合せの語に意味の広狭があり、意味上交換がほぼ可能なものに限るので、左に記す例数は、全用例数とは必ずしも一致しない。

- 。ヲフト(夫)——をとこ 7
- 。マナコ—め(目) 3
- 。アタハズ(不致)——え…ず 42、…あへず 3
- 。イキドホル——むつかる 1
- 。イコフ——やすむ 1
- 。イヌ(寝)——ぬ 4
- 。ウカル——あくがる 2 (あくがれいづ 1)
- 。ウム(倦)——あく 1
- 。ウヤマフ——かしづく 1 (もてかしづく)
- 。オソル——おづ 1 (おぢさわぐ)
- 。オヨブ——いたる 3
- 。カウブル——かづく 4
- 。キタス——こさす 1
- 。クルシブ——くるしがる 1
- 。ケス——けつ 1
- 。コヒネガフ——ねがふ 1 (ねがひまどふ)
- 。サク(裂)——やる 1 (ひきやる)
- 。サヅク(ホドコス)——たまふ 3、たまはず 3
- 。ソナフ——まうく 6
- 。タタフ——ほむ 2
- 。ツカル——こうず 6 (歩み—2、飢ゑ—1)
- 。ツラナル——ならぶ 1

- 。フサグ——ふたぐ 1
- 。マジハル——まじる 1
- 。マジフ——^{ます} 1
- 。イサギヨシ——うるはし 1
- 。ハナハダシ、スコブル——いみじ
- 。モシ——しげし 1
- 。スコシキ——わづか 1、すこし 28
- 。スミヤカ——はやし 1、とし 1
- 。ヒソカ——しのびて 6、みそか 2
- 。アラカジメ——かねて 2
- 。イマシ——イマ
- 。シバラク——しばし 6、とばかり 3
- 。ステニ、ツトニ——ハヤウ 1
- 。ママ、ヨリヨリ——ときどき 3
- 。ヤウヤク——やうやう 14
- 。ハナハダ——いたく 8
- 。ホボ——おほかた 6
- 。カツテ——つゆ(…ず) 14
- 。ネガハクハ——いかで 3

中には組合せとして良いかどうか判断に迷うもの(イサギヨシ—うるはし、など)もあるが、大体の傾向は向うに足る。他にも組合せの考えられるものがあるであろう。例えば、「アタフ」「サツク」に対し「たまふ」が考えられているが、「とらす」とあり、「とらす」は36例あるに對し、「与フ」は存しない。このような語は他にも考えられるであろう。漢文訓読系語彙の稀なことは、本資料の和文脈に基調のあることを示すものである。

この中の、ハイキドホル——むつかる√ハウヤマフ——かしづく√ハオソル——おづ√について、関一雄氏は心理動作語と具体動作語の違いであるとされ、ハカウブル——かづく√ハイヌ——ぬ√ハウカル——あくがる√にも意義差を認め、単純な対比論に注意を喚起された。⁽⁵⁾本資料では片方がないので、詳細な分析をしないが、重要な視点と思われる。

C、両文脈の語が存する。

この事例は左の8組である。

- | | | | | | | | | |
|-------|---|---|-----------|----|--------|---|---|--------------|
| 。トモガラ | 1 | — | ひとびと | 34 | 。カク(欠) | 1 | — | なし |
| 。カウベ | 2 | — | かしら | 5 | 。スミヤカ | 2 | — | はやし 1、とし 13 |
| 。カタナ | 8 | — | たち | 3 | 。マスマス | 1 | — | いとど 5、いよいよ 6 |
| 。イマス | 3 | — | おはす、おはします | | 。イマダ | 3 | — | まだ 13 |

右の中で二形対立として他書で裏付けられているものがある。その一つ、ハスミヤカニ——とくゞについては、次例が興味深い。藁しべ長者譚の初め、観音の使いが夢で青侍に告げていう。

「…いさゝかなること計らひ給をはりぬ。まつすみやかに罷り出でね。罷り出でんに、何にまれ、かにまれ、手に當らん物を取りて捨てて持たれ。それぞ、きうぢが給はりたる物。とくゞ罷り出でよ。」

観音の告げを代弁しているのが、かなり強い見下ろした表現のはずである。「…をはりぬ。」は「畢ンヌ」に相当する漢文的語調で、その語調をすぐに「すみやかに」で受け継ぎ、命令する。「…まれ…まれ」も「訓点の一用法であらう」(築島氏)とされる。代名詞「きうぢ」の祖形「きむち」について川本信幹氏は、「平安時代前期中期に貴族社会を中心に用いられた二人称名詞である。」「親しい間柄の人物間において、目上から目下に、主として、親から子、主人から従者へ用いる」などの結論を示された。平安後期の本資料で観音の用語となっているのは、古風な語感で慈悲の温かさを持って、身分の甚しく下の者に命令するのに適したためであろう。「きうぢ」は漢文訓読の語ではない。最後は和文脈の「とくゞ」でやわらげている。使い分けが見事である。『今昔』では「少シノ事ヲ授ケム。然レバ、寺ヲ出ムニ、何物也ト云フトモ只手ニ当ラム物ヲ不弃シテ、汝ガ給ハル物ト可知ベシト宣フ」とあり、右に取り上げた諸語が『古本説話集』独自の表現であることを知る。

「すみやかに」の他一例は、第五十二話で、無名の僧の功を天皇が賞讃し、更なる努力を命ずることばである。すみやかに寺に帰して、御祈よくぐせよ。(今昔14ノ35「汝ヲ速ニ寺ニ返テ弥可祈請シ」)

前話の青侍と同趣の場面、人物関係であつて、やはり「すみやかに」が意識的に用いられているのである。

漢文訓読の用語として著聞する副詞「きはめて」が唯一例ある。

才えいきはめてめでたけれど、みめはいとしもなし。文なづか高く…(第四) (閑院ノ才ハ有レドモ、長ケ高クテ—今昔24ノ54)

大江匡衡の才能への評言で、漢籍の才えいに「きはめて」、容貌みぶに「いと」と対応しているのも、文章としてふさわしい。『今昔』の「極テ」が『古本』で和文脈の語に言い換えられているのは、

極テ 身貧 ナリケル 侍 ノ (今昔19ノ13)

いみじくふかうなりけるさぶらひの (古本第四十)

近 ク寄 テ 見ルニ、 極テ 苦 シ気ナレバ、… 身ヲ搔キ搜レバ、 極テ 暑シ。

(今昔14ノ42)

ちかくよりてみるに、いとくるしげなれば、…みもかいさぐれば、いみじくあつげなれば (第五十一)

などがあつて、『古本』の和文脈基調を裏付けている。

右のうちハイマスーおはす、おはします√については、築島博士は『源氏物語』の「います」四例他を挙げて、地の文、句宮の詞の他に乳母の詞もあり、単色の語感でまとめられないので、「純粹の訓読語だったことには疑問もあると思ふが、少くとも「訓読語的」傾向があつたとは言へるかと思ふ⁽⁸⁾」とまとめられた。『古本』第六十九で、田舎人に
あはれ彼あはは上野かみつにいまするわとう主にこそいましけれ

と言わせているのや、命蓮の姉に「命蓮小院やいまする」(信貴山縁起絵巻詞書)とあるのは、古風な感じもあるが、他一例、京の大路井に集まる庶民の女が用いている。

あなうたてや。とうろくにこそいましけれ (第二十五『宇治』同文)

庶民のことばである点は共通しているので、本資料に限っては、訓読語的とも言えないようである。

ハイマダーまだ√について、「まだ」が和歌にも地の文にも用いられていて、基本の形である。「いまだ」は第一話で「み

格子かかしもいまだおろされぬなりけり」第十一話で季直少將の詞に「乱みだり心地いまだよくもおこたり侍らねども」とあり、改めて感じた感じはあるが、訓読的とは異なるようである。『宇治拾遺物語』で25対14と「いまだ」の方が多いことなど、なお考えてみたい。

△カタナ―たちVについては注意が要る。『源氏物語』の4例は光源氏など公卿の持物で、儀杖用の大刀であり、実用性の高い小形の「かたな」は登場していない。両者は使い分けせられており、『古本説話集』で「たち・かたなを折りて」(第六十九)と併べるのはその為であり、他の例も実態の異なりが判断できるものである。

△カウベ―かしらVこの語群については宮地敦子・柳田征司ちゅうじ氏などの研究で詳細を得るようになってきた。「カウベ」が女流文学資料に用いられない文体的性質と共に、両語に意義用法上の差違のあることも知られる。専ら頭部を指す「カウベ」に、上部の意を加える「かしら」という違いが存している。『古本説話集』では巻上に「かしら」5、巻下に「かうべ」2の例が分在しており、文体差とも対応するかのようであるが、右の意義差をも保持しており、

・かしら・髪と共に用いる。かしらの雪を払ひつつ(第五)、かしらにくろきかみもまじらず、かしらに雪は積れども(第四十四)、かしらの毛ふとりて(第五十二)

・「しり」と対して用いる。しりかしらにのぼるべき人(第四十四)

・かうべ・頭部を動かす。かうべを傾けたる人(第七十)

・頭部に物を付ける。このかたちをかうべにして(第六十三)

相互交換しうる語の文体的出現とは言えないと思われる。関一雄氏は『宇治拾遺物語』の例について、身体代表語「かしら」、身体部位語「かうべ」という注目すべき把握を示されている。⁽¹⁰⁾

△かく(欠)―なしV「欠く」の唯一例は「なし」と入換えができない。

仏経をさへあがめ申させたまひて、朝あさごとの御念誦みねんじゆかゝせたまはず。(第一)

ハマスマスーいとど、いよいよこの「ますます」も唯一例で、

くもりなきかゞみのひかりますくもてらさむかげにかくれざらめや（第九）

大中臣能信の和歌である。動詞「増す」も掛けている。和歌としても孤例のようで、技巧故に存在する、例外的現象である。

以上で二形対立の八組については終るのであるが、次に漢文訓読語彙とされるもの数種の存在にふれておきたい。

接続詞の類に「ならびに」「しかるを」がある。

堂だうならびに大門もん、又あまりたる物をば、僧房をつくりて（第七十）

牛のいふやう「己は迦葉仏也。しかるを、この寺の仏たすけむとて牛になり」たるなりとみて、夢ゆめさめぬ。（第七十）

双方とも「関寺牛間事」の話である。地の文と仏の代言をする牛の詞なので、堅い表現としてふさわしい所である。この話の中には、源信僧都の詞に「いかにいはむや」ともある。これらは『今昔』12ノ24に対応する話があり、問題の語は「并ニ」「而ニ」「何況ヤ」とあるものである。

「いはく」は「興福寺建立事第四七」「真福田丸事第六十」の二話にのみ7例存している。前話は興福寺再建時の奇蹟譚で、「仏師定朝がいはく」「大工吉忠…いはく」「仏師…いはく」と固い調子であり、後話は、真福田丸を仏道へ導かんとことばを巧んで勧める話で、最初「姫君」と主語を示してはやわらかく「いふやう」とし、

姫君ひめいふやう「忍しのびて文ふみなど通かよはさむに、手書てかくざらん、くちをし。手習てなふべし」

以後は、主語を省略して、「又いはく」を四度続けるのである。そのことばは右に見るように、形容詞終止形のみによる断言、「べし」による命令、などの硬質の文であり、間に「すなはちなりぬ。」と漢文訓読文脈かとされる「すなはち」を含む。姫君とはいえ、実は行基菩薩であったという、その行基の口調となっており、「いはく」はそれにふさわしく用いられているのである。

他にも漢文訓読文脈の語かとされるものもあるが、重要なものは採りあげたことになる。和文脈の語彙の中に用いられている、僅かの漢文訓読文脈の用語は、以上検討してきたように、場面人物を鮮やかに描写するために用いられているのであって、漫然と混じているのではない。そして、その意義を明らかにするために、意味の差の有無は慎重に考慮すべきことと思われるのである。

三、「頼りなし」と「貧シ」

語彙の対立と選択は、漢文訓読文脈と和文脈との対立に起因するものばかりではない。『古本説話集』と『今昔物語集』とを対比しているとき、さまざま事例に気付く。その一つ、「頼りなし」と「貧シ」との問題を採り上げてみる。

今昔 京ニ極テ貧キ 女ノ清 水ニ強ニ参ル有ケリ。(今昔16ノ30)

いまはむかし たよりなかりける女のきよ水にあながちにまいるありけり。(古本第五十九)

いまは昔 たよりなかりける女の清 水にあながちにまいるありけり。(宇治三三)

『古本説話集』の「清水寺御帳給女事」の冒頭部である。この組合せは、右の文に続くところにも「いとゞたよりなくなりまさりて」(古本)に対し「貧キ事弥ヨ増テ」(今昔)とあって孤例でないことを知る。葉しべ長者譚の青侍の詞の左例を含めて3例である。

我 貧シキ 身也。 誰師トセム (今昔16ノ28)

かくたよりのなき人は、しとりもいかにしてかし侍らん。(古本第五十八)

『古本説話集』に貧の意の「たよりのなし」は右の他に3例あり、

いみじく愛しくしけるちよは、亡くなりて、たよりなく、ずちなくなりて(第五十四)

たよりなくてかくてゐるに、馬の草のすこし欲しき。(同) 女詞

この第五十四話に对照すべき他書の話はないが、類話の中に、次の詞がある。両書で「たよりなし」を用いている。

此 便 无クテ 御 マストナラバ、 恠 クトモ 己ガ住 所ニ 御 マセカシ。(今昔16ノ7)

かくたよりになく おはしますとならば、あやしくとも 居て候所にもおはしましかよひて(宇治二〇八)

右は女が旧主の女に對しての詞で、旧主の状態を見て言っている。「貧しくておはします」云々と言い換えてみると、「貧し」では余りにあからさまな感じがあり、「便りなく」で婉曲にやわらかく述べたものと思われる。

『古本』の「まづし」3例は全て地の文、『宇治』のは4例地の文で、2例は心話(対照説話なし)である。『今昔』では馬淵和夫氏編文節索引の学恩を受けて調査してみると、「貧シ」は全15例、うち会話文(心話3例を含む)は65例も多いのであるが、注意を惹くのは、巻二十までであること、巻二十二以降は僅か10例が地の文にのみ見える。数の多寡は表現素材の関係が濃い。貧窮を機に仏縁を得る靈驗譚の多い巻十六には殊に多く出現しているが、「便りなし」もこの巻以降に僅かながら全9例見えている。会話は2例である。一つは右に引いたもの、他は、娘が夫に「此ク便无ク成ニタレバ」と実家の窮状を伝える文である(巻30ノ4)。

後に述べることであるが、『今昔』は意味の明らかで限定できる語を用い、『古本』は反対に内包の豊かな、従ってやややまいな語を用いる傾向がある。「貧シ」は漢文訓読文脈の語ではない。望ましくない意味を明瞭に示す語であるから、言い換え語としての「便りなし」が存在し、それは和文脈系の資料に比較的多く、その語感を生かして用いられているとは言えそうである。「曲殿姫君事第二十八」で、娘に上層階級の交際をさせぬ歎きの描写に、

父 貧キ 身 ニテ 思ヒ 不懸ズ。(今昔19ノ5)

かくうちあはぬみのありさまなれば、思ひもかけず。(第二十八)

「うちあはぬ」とあるも、同種の表現であろう。

「貧し」に関連して、類義の「ぶかう」がある。

極テ 身貧 ナリケル 侍 ノ夜ル昼ル 勤ニ被仕ケル (今昔19ノ13)
いみじくふかうなりけるさぶらひのよるひるまめなるが (第四十)

右の話の後部で、侍の述懐の「身のふかうとしを、いてまさる」に対応する『今昔』は「身ノ貧サハ年ヲ経テ増ル」とある。もう一例、

初 ハ 家貧 クシテ、物食ヲ事極テ難カリケルニ (今昔17ノ47)

もとはいとふかうにて、あやしきものにてぞ有ける。(第六十一)

他に、『今昔』など対照説話のない、従って、口承性の濃い説話に二例も存しているのは、「ふかう」の語性を知るのに重要であろう。

あまりかくふかうなるこそ、心にくは思ふまじけれど (第五十四)

いみじうふかうなる女の知れる人もなくたゞ一人ありけり。(第六十七)

この「ふかう」は『色葉字類抄』の「不堪下賤分 不合同」(黒川本)の「不合」に当たること川口久雄博士の注するごとくであり、『今昔物語集』に「不合」の用字で10例ある。『宇治拾遺物語』で4例全て「不幸」と表記しているのは、古写本のない現在、従えない。

「不合」は和製漢語であろう。『今昔』では本朝部にのみ見え、「極テ、不合ニテ有ケル時ニ」と巻十二では漢文訓読語と共用されているが、「極、不合ニテ上タリケレバ」と巻二十六にはあり、偏していない。巻十七では女が援助しようとする僧に対し、「不合ニ御セム程ノ事ハ訪ヒ聞エム」と述べるのは、「御不自由でいらっしゃる程度のことには、お世話いたしましょう」という改まりと婉曲を見てよいであろう。女性の心話としては『古本』の第五十四話(前引)もあり、女性の使えないものではなかった。

「不合」の成立するもとは、和語「合はぬ」であろうから、既に見た「うちあはぬみのありさま」が「貧キ身」の意であ

ることと照合するのに気づく。『源氏物語』で、装束・膳部などが望ましい状態にまで揃わないさまに用い、(夕顔、少女など)、何が不足という表現でないものも、匂宮について「女の中のうちあはずさびしき事いかなるものとも知り給はぬことわりなり」(宿木)とあって、既に、暮らしの不如意を指しているのである。『古本』の、貧女の詞、

たよりなくてかくてるたるに、あはぬことなれど、いま二三日のほど、馬うまの草くさのすこし欲ほしき、くれてんや(第五十四)
これも不如意をさしているであろう。「似つかはしくない」の意ではしっくりしない。

「貧シ」と「たよりのなし」の間にある差違は、望ましくない意味のために、露骨な語と雅言という対立に見受けられるが、意味の明瞭に限定される語と、ふくらみのある大まかな語との対立とも見受けられる。第五十八話で青侍が観音の前で訴えることは「このよにかくてあるべくは……をのづからなるたよりもあるべくは……」が『今昔』で「若シ此ノ此ニ此クテ可止クハ……少ノ便ヲモ可与給クハ……」とあるのは一例で、このような点を取り上げて『古本』の語彙相を論ずることもまた興味深い課題であろう。

四、和語と漢語

『今昔物語集』の漢語と『古本説話集』の和語とが対応する場合がかなり存する。その主な例を挙げよう。

美麗 此ク美麗ナレドモ(19ノ5) 形モ美麗ニ(19ノ5)

めでたし、よし かくめでたしとも(第28) かたちもよく(第28)

護法、(悪)鬼 護法ノ付タル者ノ様ニ(19ノ13) 悪鬼ヲ揮ハ(14ノ35)

もの もののつきたるやうに(第40) あしき物どもはらへ(第52)

熱病 熱病ヲ受テ日来重ク悩ミ煩ヒ給ヒケレバ(14ノ35)

よここち よここち大事だいじに煩わづひ給ければ(第52)

見證 傍ニ見證スル者共 (16ノ37)

きく 傍かたはらにてきく人ひとは (第57)

宿報 前世ノ宿報拙シト云フトモ (16ノ30)

むくひ さきのよのむくひなりといふとも (第59)

身ノ宿世 身ノ宿世思ヒ知ラレテ (16ノ30)

身のほど 身のほどおもひしられて (第59)

材木 寺ノ材木引ク黒キ牛 (12ノ24)

木 寺の木ひくうし (第70)

恭敬礼拝 トテ恭敬礼拝スル事无限シ (12ノ24)

をがむ とてをがみ給ふと (第70)

二字漢語は、その意味が詳しく、従って限定され、対応する和語は意味広く、適用範囲の広さが目立つ。この和語の性質は良い面を持っているが、反面ことばの未分化を示すもので、社会の複雑化進化に伴って漢語を必要としてくるわけである。右の「材木」も『古本』で話末に再度出てくる時は、「さい木」とあって文意を明確にしている。

前世 汝ガ前世ノ罪報ヲバ不知シテ (16ノ28)

さきのよ をのれがさきのよのつみのむくいをばしらで (第58)

右の「さきのよ」「つみのむくひ」は仏教思想でなくともありうることはではあろうが、ここでは漢語の和語化の形になる。

絶入 既ニ絶入シタリケルニコソ有ケル (16ノ28)

たえいる たえいりたりけるにこそ有けれ (第58)

右は貴族の女主人の詞である。大系『今昔』の注に「たえいる」の音読語と指摘し、「古本かく作る」とあり、『色葉字類

抄』を指摘している。それは「絶入セニウ」であるが、同じく疊字の語末には「絶入リ畢マシ」もある。(前者は「施入」か。中国には存しないようなので、注のごとく和製漢語であろう。それも引き続きは「絶入リ畢マシ」と和語となっている。なお、侍者が女主人の状態を述べるには「御とのごもらせ給ければ」と表現して、「たえいる」という明らさまな語を用いていない(『今昔』にこの詞なし)のにも注目したい。「おやすみになっていらっしやうたので」は氣絶の婉曲表現であり、ここにも『古本』の会話の生彩あることが感ぜられるのである。

『今昔』の漢語が『古本』で他の漢語に対応する場合がある。

僧 己ガ兄弟ニテ侍ル僧ニ付テ(19ノ5)

法師 をのがせうとなるほうしにわけて(第28)

「僧」よりも「法師」が身近な使用語であったことは、早く天平九年但馬国正税帳書き入れの「僧法志」という著名な例で知られる。その性質によって、右の説話の中で、『今昔』の和語「尼」(二人ノ尼出タリ)までも「女ほうし、ひとりいできたり」となり、第六十九話終尾で「出家シテ後」が「法師になりて後」となっており、「法師」を和語といってもよいほどになっているのがわかるのである。

祈念 此ク祈念シテ(14ノ35)

ねんず かならずく^{げん}験あらせ給へとねんじて(第52)

下人 下人共ノ遣ラム方无ク多カリケレバ(12ノ24)

げす げすのやらむかたなく^{おほ}多かりければ(第70)

これらも和語に近い漢語とみてよいであろう。

『古本説話集』全体として、ひらがな表記和文体で、王朝的印象も濃いけれども、時代色を反映して、漢語は多いのである。今、名詞を列挙するのは省略し、他品詞のみ挙げよう。連体詞接続詞には例がない。

形容詞——ずちなし、びんなし、ほいなし、ううたし、らうらうし。

形容動詞——優なり、希有なり、不合なり、猛なり、無下なり、不便なり いか様なり（か、こと、さ）
ずちなげなり、らうたげなり

副詞——軽々に、とみに、不意に、別に、一定

動詞——愛敬づく、装束く、気色ばむ、念じ入る、

愛す、要す、感ず、具す、興ず、験ず、困ず、請ず、信ず、誦す、證す、損ず、持す、調ず、念ず、判ず、変ず、論ず、盆す

安置す、学問す、饗応す、供養す、懸想す、結縁す、希望す、護身す、御覽す、精進す、沙汰す、懺悔す、受戒す、修行す、出家す、追従す、土葬す、往生す

形容詞諸語のうち「ずちなし」の中世語としての特性について、別に述べたことがある。⁽¹¹⁾『枕草子』より出始める語である。「びんなし」の例は「禄なからんもびむなく」と第一話にあり、対照できる『大鏡』では「禄なからんもたよりなく」とあり、「たよりなし」の漢語表現となっている。「不便」の出現と呼応するものであろう。

形容動詞諸語のうち、「不合なり」については既に述べた。『竹取物語』に既にあるものの女流文学には用いられず、『大鏡』などに見える。

副詞諸語の中で「軽々に」がどれだけ一般化した語であったかは判らない。第七十話で「車よりをりて歩まむ、きやうくにおぼしければ」と公卿の心理を述べ、『今昔』も「軽々ニ」とあるものである。「に」を伴わない形で副詞となった「一定」も注意される。「一定極楽へまいらせ給ぬらん」と第一話に出ている。このような副詞は中世を下るにつれて多くなる。

動詞の中では一語のサ変動詞の多いこと、「困ず」を用いて「疲る」を用いないこと、などが注意される。右に挙げなかったが、次例は用法が興味深い。「し」の脱か、これで連用中止法なのかははっきりしない。

湯をかへ、めぐりをさうぢ、標をひき、花香をたてまつりて(第69)

小林芳規博士の指摘される「漢語動詞の連用形を付けずに、そのままで動詞的に用いている」例であろうか。⁽¹²⁾

『古本説話集』の語彙について、主に語性の面から考えてきた。その基調と考える口語性を明らかにするものとしては、和語からの考察に薄い。漢文訓読文脈の語は数少ないが、場面に応じて有意な用い方をされていること、漢語にも俗語的側面があつて時代色を反映していることなどを見て、和語にも王朝的用語よりも、口語性の強い語が多いことを明らかにしようと思つたのであるが、この方面については後考にまつこととなつた。

注

- (1) 「野飼の駒―古語」のがふ」の発掘と古本説話集と―」(『国語国文』41巻7号、昭和47・7)
- (2) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東大出版会、昭和38)第四章、三五〇頁。これについては松尾拾『今昔物語集の文体の研究』(昭和42、明治書院)に批判的検討が加えられている。
- (3) 注2文献、四八五頁。
- (4) 『平安女流文学のことば』(至文堂、昭和43)
- (5) 「字拾遺物語の「和文語」動詞と「訓読語」動詞の一考察―中古仮名文学用語の性格に関する一試論―」(『山口国文』第六号、昭和58・3)
- (6) 注2文献、七一一頁。
- (7) 「きむち」考」(『国学院雑誌』75巻6号、昭和49・6)
- (8) 注2文献、五九八頁。
- (9) 宮地敦子『身心語彙の史的研究』(明治書院、昭和54)、柳田征司「室町時代における口語語彙と文語語彙―アタマ・カシラ・カウベについて」(『国語と国文学』49巻11号、昭和47・11)
- (10) 「平仮名物語用語の一側面―ぬ」「イヌ」「かしら」「カウベ」「および」「ユビ」(『山口国文』7号、昭和59・3)

- (11) 「すぢなくて」と「すべなくて」『リポート笠間』21号、昭和55・10)
- (12) 「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』一九七一・三 用例として『図書寮本宝物集』『高山寺本古往来』が挙げられている。